

予防はまず禁煙から



●金曜特集 くらしと健康のページ●

和歌山病院市民公開講座 「肺がんの診断と治療の実際」

国立病院機構和歌山病院の第4回市民公開講座が先月27日、御坊市民文化会館で開かれ、約100人が肺の病気について医師や看護師の講演を聞いた。呼吸器内科の小野英也医長は「肺がんの診断と治療の実際」をテーマに、肺がんの検査方法、治療法、予防などについて説明し、「肺がんのリスクを下げる方法はないが、リスクを上げる因子は分かっている。予防はまず禁煙。40歳を過ぎれば男女とも年1回の検診を」と呼びかけた。



肺がんの予防や最新の治療法を説明する小野医長

肺がんの症状は、がんができる場所によって異なり、主なものはせき、痰、血痰、声がれ、嚔下困難、胸痛などが挙げられるが、肺がん特有の症状はない。どれも一般的な風邪によく似た症状が多く、病院を訪れる人も「風邪がなかなか治らない」といって訪れる人が多い。風邪であれば1週間、長くても2週間もすれば治るが、風邪のような症状が2週間以上続くときは、放っておくと怖い病気が隠れていることが多い。「せきや痰が2週間以上続く場合は、風邪とは違う病気を疑い、とりあえず病院で診察を受けることが重要となる。肺がんの7割は無症状で、ほとんどは検診、または他の病気の検査によって発見されることが多い。

治療と並行して 緩和ケアも

確定診断が終わると、実際のがんに対する治療と緩和治療がスタートする。体の痛みや精神的なつらさをやわらげるための緩和ケア(治療)は、かつては手の施しようのない末期がん患者のためのものというイメージが強かったが、最近は確定診断がついた時点で、手術や放射線、抗がん剤などの治療と並行して行われるようになってきている。がんに対する治療のうち、抗がん剤治療には、従来からある細胞障害性抗がん剤と分子標的剤の2種類がある。細胞障害性抗がん剤は正常な細胞も傷つけてしまうが、改良が重ねられていく分子標的剤はがんの遺伝子のタイプに合わせ、副作用がなくピンポイントでがんの効果のあるものも開発されており、今後の研究・改良が注目される分野となっている。

治療開始の前には 生検等で確定診断

もし肺にがんが見つかったら、治療の前に確定診断を行う。画像、血液、病理の3種類があり、このうち病理とは「生検(せいけん)」という肺の組織の一部を採取し、顕微鏡レベルで詳しく調べる検査のこと。気管支鏡下肺生検、CTガイド下肺生検、開胸肺生検などの方法がある。この生検でがんのタイプ、さらには発生場所による肺がんのタイプを見極め、他の臓器などへの

40歳を過ぎれば 毎年CT検診を

治療に要する期間は、手術の場合は2週

間から4週間、放射線のみの場合は約6週間、抗がん剤治療(細胞障害性抗がん剤)の場合は3、4カ月が目安。これらの治療後、定期的な通院で経過をみながら、5年間再発がなければ「治癒」になるという。小野医長は、肺がんのリスクを高めるものとして喫煙を挙げ、男女別のたばこを吸う人、吸わない人の発がん率などを示しながら、予防にはたばこを吸わないことが一番であることを強調。男女とも40歳を過ぎれば年1回の画像検診(非喫煙者は胸部レントゲン、喫煙者は胸部レントゲンと喀痰細胞診)を受けることが望ましく、「医師の立場からは、できればレントゲンよりはるかに高い確率で初期の肺がんを見つけれらるCT検診を受けてもらえれば」と話した。

和歌山病院では1回5000円程度でCT検診を受けることができる。問い合わせはTEL 33250。